

勝林寺寺報

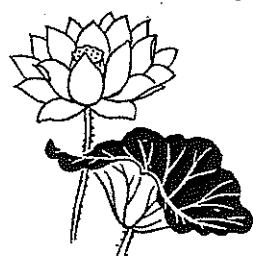
攝取・心光常照護 已能離破無明闇

貪愛驛憎之雲霧 常覆真実信心天

私は三十五年前に大学を卒業してから、いつたん京都市の知的障碍者施設に勤めました。ちょうどそのころ日本も、1981年の国際障碍者年のテーマ「完全参加と平等」が福祉現場の中で呼ばれ、ノーマライゼーションの理念が社会全体に広まつていった頃でした。最近はソーシャルといえばデイスタンスに続いていますが、その当時知的障碍者の現場ではソーシャルといえばインクルージョンでした。ソーシャル・インクルージョン（社会的包摶）を推し進めていくことが、若い福祉ワーカーの熱い夢でした。生まれてからずっと高い壇の中に閉じ込められて生活してきた重度の知的障碍者を、街のミスタードーナツに連れ出してお茶を飲んだり、市民プールに泳ぎに行って、水の中でウンチをして、プールの水全部の取り換えとなり市の幹部から怒鳴られたり、いろいろやりました。

その後私は老人福祉を中心に活動してきたのですが、その基本的な方向性は“ソーシャル・インクルージョン”を基にした「地域包括ケア」です。今では現場で直接仕事をする」とは少なくなつた中ですが、「地域包括支援センター」の運用に口をはさんだり、地域福祉計画の策定に携わつたりしながら、今も“ソーシャル・インクルージョン”的方向性が少しでも推し進められていくよう尽力しているつもりです。

元を返せば、福祉の世界に足を突っ込む前、お念仏の中で出会わせていただいた阿弥陀様の、



（文責 住職）

お前を常に照らし、護り、攝取して、捨てるこ

とのない心のひかりに、いかにして自分は現代社会の中で應えていけばいいのか、考えさせられたのだと思います。攝取不捨の心は私の中

で“包摶”につながり、“包括”に結ばれます。

ずいぶんと難しい専門用語を使ってしまった

ようですが、この三十年間でこれらの言葉もだいぶ広まり、知られてきたように思います。オ

リンピックの開幕式でも、内容の是非はともかくとして“多様性”は大きなテーマとなっていました。しかし、そのような言葉の広がりと裏

腹に、現実は分断、選別、格差がこれまた三十

年前の比でなく深まっています。社会はあらゆる場面で非難と排除、疑惑と不信が渦巻き、貪

り、怒り、憎しみの霧の中で先が見えず、緊張

は限界の様相です。」の一律背反する方向性（社

会的包摶と社会的排除）の中で、今の人類は崖

っぷちに立っています。先日の卓球混合ダブル

ス準々決勝戦でのドイツとの歴史的攻防と同じ

くらい、社会は“包摶”と“排除”でせめぎ合つ

ているようです。

現実社会の中で阿弥陀様の願いを実践するこ

とが容易でないことは親鸞聖人から重々お聞か

せいたいでいます。親鸞さまは「和讃の中で

「小慈小悲もなき身にて 有情利益はおもふ

まじ 如来の願船いまさずは 苦海をいか

でかわたるべき」と、現実社会での私たちの実

践活動の限界を痛烈に嘆かれました。福祉活動

からいきなり足を洗うこともできませんが、ど

うしようもなく嘆かわしいこの身との世の現

念仏に励んでいかなければならぬと思う今日

この頃です。

ご案内

全戦没者追悼法要

戦争を体験された方たちから話をされた「平和のバトン」をさらに次の世代に引き継ぎ、訪い（とむらう）

八月八日（日） 弘道校区 戦没者追悼式

横山洋海宅 一三回忌

日時 八月八日（日） 午後二時より

内容 戦没者呼名
お勤め
記念法話

九日（月） 坂本政司宅 初盆
一一日（火） 中嶋庄二宅 初盆
一一日（水） 出石A 盆

一一日（木） 出石B 盆
一一日（金） 出石C 盆

安井恵一宅 初盆

長谷川進宅 初盆

大石昌之宅 初盆

数森成美宅 初盆

一四日（土） 藤林寺 子ども会 《中止》

一五日（日） 生田善七宅 一周忌

一九日（木） 藤林寺 子ども会 《中止》

二二日（日） 地蔵盆

二三日（月） 生田善七宅 一周忌

二六日（木） みのりを聞く会

ご報告

永代経法要 ようやく緊急事態宣言が解除

になり、全て門徒の皆さんにお参りの声掛けができた久しぶりの

法要で、本当に楽しみにしていました。しかし、一日目の法要の開始二時間前から雨がどんどん強くなり、ついに「大雨警報」

が発令となるアクシデントに見舞われました。急遽、接待をお願いしていた仏婦役員様へは、

自宅待機をお願いし、安全に来ていただける

方のみでお勤めさせていただきました。用意

していた椅子もお茶もお菓子も、残念ながら

たくさん余ってしまいました。でも、とてもうれしいこともありました。お孫さんや息子

さんやお嫁さんが、おじいちゃんおばあちゃんが安全にお参りできるように、パソコンで

お寺のライブ配信とつなげてくださいました。うれしくありがたいことでした。二日目は雨

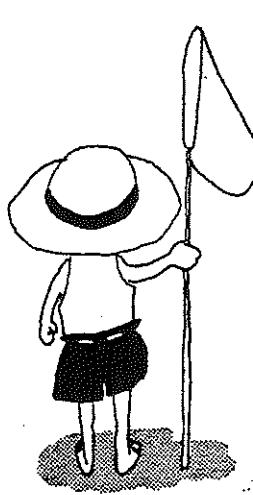
も小降りになり、いつもの皆さんがいつものようにお参りくださいました。ありがとうございました。

八月 勝林寺 予定

七日（土） 兼井通仁宅 初盆

八日（日） 弘道校区 戦没者追悼式

横山洋海宅 一三回忌



（敬称略）

(「真宗入門」三十五ページよりつづき)
宗教的な意味での出会いとは、とても厳しい出来事であるといった理由であります。

しかしまた、こういう宗教的な出会いは、それが現実のあり方をきびしく破るものであるところ、その脱皮をおして新しい成長が始まりてきます。ちょうど竹の子が、一枚ずつ皮をぬぎながら空に向かって成長してゆくように、少しづつ育てられてゆくのであります。「」のように、たとえわずかであろうとも、皮をぬぎながら育てられてゆく、「」に「よき人」に出会うということのまことの意味があると思われます。親鸞聖人が法然上人に出会われたといふことも、またこのよくなきがしい出会いであり、そしてまたそのことをよおして、脱皮と成長が成り立つてゆくような出会いがありました。

私たちもまたおたがいに、自分の人生において、「よき人」と呼べるような、こころの師、こころの友と出会いたいものであります。現代では人間と人間との関係はしだいにうとくなり、人間はいまいよ孤独になつてゆきつゝあるといわれますが、なればこそ、私たちはいつそう心して、道を求め、教えを尋ねる、とが大切であり、またまことの出会いを願るべきでありますよう。そしてこのような出会いとは、そのことを求めて生きるものにのみひらくれてくる世界です。『無量寿經』といふお経には、念佛の教えをくわしく解き終わってから、次のように語られております。

仏法を学ばんとするものは、いかなる障害を
こえて、たとえ眼前にはてしない火の海が
ろがろうとも、求めて、なお求めてすすめ
といふ、とてもきびしいさとしの言葉であら



世の中にはいろいろな宗教があります。人類は大昔のころから今日に至るまで、そしてまた、どの国でも、いずれの民族でも、何らかの宗教をもつております。そして多くの人々は、さまざま縁により、人々とのふれあいによって、それぞれの宗教にかかわっております。私たちもいまは縁あつて仏教に出会い、その中でも、ことに親鸞聖人によつて明らかにされた仏教としての、浄土真宗の教えを学んでおります。しかしながら、それについては、まずこの浄土真宗の教えが、それ以外の多くの宗教と、いかにちがい、どういう特色を持つてゐるかを、よく心得ておくことが大切と思われます。 (つづく)

ます。懸命に道を求め、教えを求めて歩むならば、もうその足元から出会いが始まっています。親鸞聖人は、六角堂参籠という曲折をとおして、法然上人に出会いましたが、親鸞聖人が大きな決心をして、比叡山を下りられたとき、もうそこから法然上人との出会いが始まっていたといいうのではないでしようか。教えに従い、よき人にはないでしようか。教えに従い、よき人に出会うということは、何よりも私たちひとりひとりが、どれほど心深く道を求め、教えを求めて出立するかにかかわっていることだと思います。おたがいに、いよいよ心をこめ、はげましあって、この求道の旅を歩み続けてゆきたいものであります。

お慈悲の中だからのう

山本
佛骨

六

老いの時も若さ時も、善人の時も悪人の時も、この身のままやすくわれていくといふ「利益」が念仏の行者には備わっています。ですからいつどのようない死の迎え方をしても、それは何ら往生のきわりとはなりません。わたしたちはただ「まかせよ、必ずすぐう」と喚んでくださいるみ仮の仰せにすべてをゆだね、大慈大悲をもつてもうひとを利益する安樂淨土を田指すのです。

淨土真宗の救いは、攫取不捨の利益(「歎異抄」第一条)といわれています。それは苦惱の衆生を必ずおさむ、おもり、すべつとこゝに阿弥陀さまの大慈大悲のみ心のことです。「慈」とは最高の友愛の情をもつて、惜しみなく樂を与えるよつとする心であり、「悲」とは苦しみや悲しみに同感して、苦を取り除くとする心です。その心は一切の心からわれを離れた純粋平等の心を意味しますから、曰夫の慈悲(小悲)や聖者の慈悲(中悲)をはるかに超えて、います。

法語カレンダー（八月）

まあ、どいにおひで
お慈悲の中だからのう

山本 佛骨

今月は、山本佛骨先生のことばです。これは「喜憂を超えた人—山本佛骨先生をしのぶ」（『花と詩と念仏』梯實圓著）と題した文中に出ていふもので、〈御往生の少し前に、病院をたずねたところに、ちょうど病室をかえられた直後でしたが、「今まで何がどうなるのか」とおしゃりますので「お慈悲になられるまで、もうしばらく御辛棒ください」と、やがて思い出されます〉とあり、先生の信仰体験からにじみ出る他力救済の妙味を感じられま

とすん 不安視されていたオリンピックが開幕し、連日アスリートの活躍に心躍る日々を送っているのは私だけでしょうか。出場している選手皆さんは、誰も並々ならぬ努力を積み重ねてあの場に立つておられます。月並みな言葉しか見当たりませんが、心から「すごい！」と思ひます。並べて書くのが大変おこがましいですが、こう見えて私もかつてはスポーツマン（今はアスリートと呼ぶそうですが、さすがにちよつと抵抗があります）、中学高校でバレーボールをし、社会人になってからも誘われてほんの少し。一応うまくなりたい強くなりたいと思いながら日々練習をしていました。しかし、努力することしんどいことは嫌いでした。練習は休みませんが、最初のランニングはしんどいから少しでも遅れて行こうとしたり、レシーブ練習の時、指導者が疲れてくる頃合いを見てコートに入つたり・「楽をして結果を出す」とばかり考えていたあの頃を「私らしいな」と思い出し、テレビで躍動するアスリートの姿に勝手に重ね合わせて、ひとり笑い。しかし、そんな私が、今は、「楽はしたらあかん」と自分に言い聞かせて毎日を送ります。というのも、少し前、ベッド脇でいつものように着替えていて、よろけた拍子にベッドに腰掛ける状態になつたんです。